

X 事後指導について

1. 指導内容

(1) 事後指導における総括と自己評価

1) 実習事後指導の目標と内容

保育実習事後指導の意義とは、日常の学内生活において体験することが困難な経験、すなわち、子ども、保護者、専門職者、地域社会等との具体的な関わりを通して得られた体験や経験について、学生自身が必要な学びとして認識できるよう必要な教育活動に取り組むことである。

「教科目の教授内容」に示された「保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」における実習事後指導では、すべて共通の目標と内容が記載されている。＜目標＞は「5. 実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。」とあり、＜内容＞は「5. 事後指導における実習の総括と課題の明確化」として、「(1) 実習の総括と自己評価」と「(2) 課題の明確化」の2点が挙げられている。実習全体の振り返り（省察）を行い総括することを通して、学生が主観的かつ客観的に自己評価を行い、保育者を目指す者としての成長と課題を明らかにすることが実習事後指導における主要な目標と内容になる。

2) 実習の総括

①実習終了時のまとめと振り返り

実習の終了にあたり、実習先との関係の中で実習の振り返りを行うことができる機会が多くあるため、それぞれの機会をとらえて実習のまとめと振り返り（省察）を行うとよい。

○実習先における実習反省会での振り返り

実習終了時には、実習先で反省会が開かれることが多い。実習先の指導者からの指導・助言は実習を振り返る際の貴重な資料となるため、しっかりと記録し、学生自身が理解しておく必要がある。

○実習日誌のまとめの記入

実習日誌の最終ページには「まとめ」の欄があり、「まとめ」を記入することは、学生にとって実習全体を振り返るよい機会となる。記入にあたっては、学生自身の課題として実習開始時に設定した目標に準拠して、その目標が達成されたかどうか、実習活動の振り返りや日々の実習記録を読み返し、主観的に自分で行ってきた実習を理解しておくことが重要である。

○謝礼状の作成

実習直後に作成する謝礼状は、指導していただいた実習先への感謝の気持ちを伝えることが目的であるが、その作成の過程では、実習における自己の学びを振り返るよい機会にもなる。そのため、しっかりと実習の振り返りを行いながら謝礼状の作成ができるようにする。

②実習報告書等による実習の振り返り

実習後に行う作業の一つとして、「実習報告書（レポート）」の作成がある。報告書（レポート）作成の目的としては、①自分自身で実習を振り返りまとめを行うこと、②実習終了の報告（報告書作成だけでなく、訪問指導担当教員や実習指導を受けた教員にも必ず報告をする）、③後輩のための参考資料とすること等が挙げられる。

実習報告書（レポート）に記載する内容は養成校毎に異なるが、主な内容として、①実習先の概要、②実習の内容、③実習による学び、④実習の反省、⑤指導者からの指導・助言、⑥感想や今後の課題、⑦後輩へのアドバイス等を記入する。

3) 自己評価

学生が自己評価を行うことは、実習の振り返り（省察）を客観的に行うために非常に有効な手段であり、実習の成果と今後の課題を明確にするための重要な作業の一つである。

学生が自己評価するためのチェックリストは、実習先による評価票と同じ項目を用いて行うことが多い。実習先からの評価票と同じ項目により自己評価を行うことで、学生の実習に対する自己認識（出来たことと出来なかったこと）を確認することもできる。

また、「保育実践演習」や「教職実践演習」等で作成する「履修カルテ」を用いて自己評価が行われることもある。「履修カルテ」自体は、実習だけでなく、養成校での学びも含めて自己評価するものである。しかし、実習終了時においては保育者に必要な資質能力（乳幼児期における教育・保育についての理解、子どもについての理解、他者との協力、コミュニケーション、基礎知識や技能など）の確認にも活用することが出来る。

ここで重要なことは、学生自身が「出来たこと」と「出来なかったこと」を把握することと、さらにその理由について考えることである。理由を導き出すことができれば、次の実習に向けた改善点が明らかになり、実習後の課題として自分が行うべきことが見えてくるであろう。

（2）事後指導における課題の明確化

1) 実習先からの評価のフィードバック

実習終了後に実習先から返送された「実習評価票」を養成校の教員から学生へフィードバックし、その結果を解釈することで、実習の振り返り（省察）を行う。

その際、「実習評価票」と、学生が自覚している評価内容（実習中に指導された内容）や、学生による自己評価との照合を行っていく。評価票の評点や所見から、学生自身の実習の成果と課題を客観的に把握し、もし、その評価に大きな相違がある場合は、教員とのコミュニケーションなどを通して、その「ズレ（自分で思っているよりも出来ていることと出来ていないこと）」を十分に認識し、これから行うべき課題を明確にしていくことが重要である。

2) 自己課題の明確化

学生が、自らの実習を主観的、客観的に振り返ることができれば、自ずと次に行うべき課題が見えてくる。自己評価をしっかりと行い、実習で「出来たこと」、「出来なかったこと」、そしてそれらの理由を把握することで次の課題を明確にすることができるだろう。

振り返り（省察）によって明らかになった課題は、実習Ⅰの場合は実習Ⅱの新たな目標となり、実習Ⅱの場合は今後保育者として働く際の目標となる。重要なことは、実習による実践と省察が繰り返されることによって、保育者になるための継続的な成長と学びの機会が確保されることである。

(3) 事後指導における学びの共有

1) グループワークによる実習の振り返り

学生が主観的および客観的に実習を振り返り（省察）、実習後の課題を明確にすることは重要であるが、これを学生一人で行うことは容易ではない。主として学生が自分で行う振り返りは主観的であり、客観的に振り返るには他者からの視点を取り入れることが必要になる。「XⅢ 事後指導における課題の明確化」で述べたように、養成校教員とのコミュニケーションによって振り返りを深めていくことができるが、これに加えて、同じ実習を経験した学生同士でのコミュニケーションによって、さらに振り返りを深めることが可能になる。

その方法としては、さまざまなグループワークの手法が参考になる。学生の人数や状況等に応じてそれらの手法を使い分け、学生の振り返り（省察）が深まるようにするとよいだろう。

2) 実習報告会による学びの共有

実習を経験した自分自身の学びを他者に伝えるとともに、他の学生の学びについても共有する機会として「実習報告会」がある。実習報告会の進め方についてはさまざまな形式があるため、詳細は「指導方法編」を参照されたい。

こうした学生同士の対話や成果発表会等を通して、実習体験を共有しながら、より深い次元での省察を可能にするとともに、他者の経験を通じて保育に対する視野を拡大することに結びついていくものと考えられる。

2. 指導方法

(1) 講義型指導

1) まとめ（総括）

巡回指導や実習施設との連絡から得られた内容、実習記録や実習日誌、実習評価から得られた実習の内容を基礎とし、養成校教員が実習活動に関する総括やまとめを行う。これにより、学生が実習の総括と自己評価について意識し、振り返るための契機とすることができる。

2) 全体評価

巡回指導の経験や実習記録および実習日誌をふまえて、養成校教員が実習を全体評価する。具体的には、実習内容や展開、知識、技能、態度、礼節等広くその内容について評価を行う。学生は平均的な実習の風景を、養成校教員を通じて知ることによって自己の体験を客観的に位置づけることができ、そのことがより正確な自己評価へとつながる。

3) 講義内で実施する報告会（施設説明、体験、実習内容）

講義の中で、簡易的な報告会がなされる場合がある。例えば、実習施設ごとに代表者が実習施設の実態や学んだ内容、感想、反省を簡単に発表し、その中からいくつかの問題点を取り出して、全体で話し合う。

(2) イベント型実習報告会

(単独学年、異学年、施設種別、外部参加者等により区分される)

*報告会の形式としては、ポスター発表／スライド発表／レジュメ発表、あるいは個人発表／グループ発表、全員発表／代表者発表など様々な形式が考えられる。

- ①各学生が実習内容・体験を報告することで、実習の総括と自己評価を行い、次の実習に向けての、あるいは保育者になるにあたっての課題を明確化する。
- ②学生同士が実習内容・体験を報告し合い情報を共有することによって、自己の経験を客観的に捉えるとともに、他者の経験から新たな知見を獲得する。
- ③実習該当学生以外の異学年と合同による報告会をした場合、次期学生への情報提供を行うことができ、効果的な事前指導の機会にすることができる。
- ④施設実習に関して、同種別ごとに報告会をした場合、種別に特有の現状や課題について理解し、学びを深めることができる。他方で、異種別ごとに報告会をした場合、学生は自分の実習していない種別の施設の現状や課題について理解し、学びを広げることができる。
- ⑤学外からの参加者（現場関係者、高校生、保育者、地域住民など）が参加することで、他者の視点がより強く意識され、学生にとってモチベーションの向上や主体性の発揮につながる。例えばオープンキャンパスや学園祭など多くの人の前で発表を成功させることは、学生に自信を与えるであろう。また、現場の保育者を招いて発表に対する意見を戴くことは、報告会での学びを実地に活かしていく際の有益な示唆となる。

種別毎の担当教員による実習指導（短期大学）

○事後指導の進め方

施設実習事前事後指導において、全教員で施設別に指導を分担してきめ細やかな指導を心がけている。福祉系の科目担当者による授業以外に、事前授業として全教員が担当する施設に行く学生のみを対象に対応する時間を設けている。内容は施設実習における不安や悩みを共有する、事前に準備しておくべきことの確認、先輩による記録の確認などである。また、その施設だからこそ留意すべき点なども担当教員が情報として伝える。基本的にその担当教員が実習訪問と事後の振り返りも兼ねて行うことで施設側の要望や変化などをつかみやすく、一連の流れの中で細やかな学生への配慮につながっている。

○施設実習報告会

施設実習について、種別に分かれて実習施設ごとに2年生が1年生に体験した実習を報告し、取り組む姿勢などを教える時間を設けている。

1年生は自分が次の年実施する施設実習についてイメージが持てることをねらいに参加し質問などを行う。2年生は施設実習を振り返りながら報告することで学びを深めている。

1年生の前期で実習先（施設）を決めてしまうことから、施設についての学びを行う以前の決定となる。できるだけ体験した2年生から直に報告を受けることで来年の実習へスムーズに進んでほしいと考えて行っている。

実習評価票を基にした事後指導（短期大学）

実習訪問指導内容と実習施設からの評価票を整理し、評価内容をもとに課題を説明している。実習生全員の評価票を分類・整理（Excelに書き出して集計）して、コメントを抽出し必要なもの（数の多いもの、あるいは数が少なくとも絶対にあってはならないもの）を学生全体に提示、説明している。個別指導は社会人としての基本（遅刻・提出物の期限厳守・服装など）を指摘された一部の学生に対して行っている。

（3）記録介在型指導

1）レポート作成（報告書・記録整理・チェックシート等）

自身の活動について書くこと（言語化）を通して、実習の総括と自己評価を行い、自己の課題を明確化する。さらに、教員からコメントをもらうことで、自己の体験を客観的に捉えることができる。完成したレポートは記録として保存されるため、情報伝達や現状確認、課題解決等の役割を担い、振り返り型の学習として効果的である。

① 報告書作成

学生個人が実習から学んだこと、自分自身の反省点や今後の課題等をまとめてレポートに書く。例えば、活動を限定しての詳細な記録の作成、ある保育場面を抜き出すプロセスレコードの作成、実習内容をまとめた実習新聞の作成、実習報告会での学びを受けて総括レポートの作成等、様々な形が考えられる。

② 実習記録の整理

日々の実習記録を読み返し、体験を通しての感想や反省、保育に対する自分の考えを、指導者の意見や助言をふまえて、日誌の整理や再記載、まとめの作成を行なう。また、学生同士で日誌を交換して読み合うことでの体験の共有や実習日誌を基とした場面教材の作成等も行なわれる。

③ チェックシートの作成

知識、技能、態度等に関するチェックリスト（養成校教員・養成校側が規定する場合と学生自身が規定する場合がある）やリフレクションシートを用いて、実習を自己評価することで自己の課題を明確にする。チェックシートは視覚的に理解しやすく、学生と養成校教員の両者にとって、実習の成果と課題が一目で分かるのが大きな利点である。

④ 実習報告会の資料作成

実習報告会に向けて、ポスター資料やプレゼン資料、原稿等をはじめとする報告書を作成する。教育活動の一環として、実習報告会自体の企画・運営や諸準備等を学生自身が行う場合もある。集団活動構築の具体的体験の場ともなるので、その実施自体が意味を持つ場合もある。

自己評価シートによる事後指導（短期大学）

実習終了後、学生自身が自己評価シートを作成し、その結果をもとに自らの課題を確認している。実習終了後1～2週間以内の時期に、事後指導の中で30分間と時間を限定して行っている。記入項目は評価票と同じであり、多く書かれている内容をExcelで抽出し、次の実習の1週間前程度に、全体に対して説明する形で使っている。ピントが外れている学生に対しては、個別指導（面談で振り返りながら）を行う。自己評価シートの記述内容と園からのコメントが対応していない学生に対しては、実習園からの評価と対応させて個別指導を行う。個別指導に当たっては、日常の授業態度を中心に選別し、授業態度が悪く実習の評価が良い学生も呼んで褒めている。

2) 謝礼状作成

謝礼状の作成は、実習を受け入れ、成長の機会を与えてくれた実習施設への感謝の気持ちを伝える目的で行われる。同時に、学生にとっては実習での学びや課題を振り返って記述する機会でもある。実習終了後、1週間ないしは2週間以内に出すことが望ましい。書き方は一般的な礼状に準じ、社会的な礼儀を学ぶ機会になる。ただし、自分の言葉で表現することが大切であり、具体的な場面や活動を振り返り、自身の学びの成果を示して謝意を表したい。

実習経験を生かした創作絵本作成（短期大学）

○実習と学内の授業とのつながりを意識した事後指導

実習経験を、以降の授業に生かす課題を考え、教材作り（パワーポイントによる創作絵本作成）をしている。1年次の「情報処理実習」とのつながりを基に、実習と学びがつながるように考えて実施している。

○授業の流れ

以下はその授業の流れである。

- ①実習後、少人数（2～4名）グループで話し合う（例：実習の気づきや学んだ事）ことで、学びを分かち合う。
- ②何をつくるか考える（子供向けの童話というテーマは伝える）。
- ③シナリオ作り（対象年齢も学生たちに一任）をする。自分たちの絵をスキャナーまたはインターネットで画像を取り込みながら行う。発達を体験した実習が生きてくるように指導する。パワーポイントで全体発表する。観客は幼児という設定で行う。総合評価は、シナリオ・作品できばえ・発表・プレゼンなどから行う。

（4）グループワーク型指導（ディスカッション、対話型、PBL、カンファレンス）

1) ディスカッション

少人数のグループに分かれて、話し合い（実習施設の概要、体験内容、保育内容、子どもや保護者の関わり、指導担当者からの指導、実習の感想・反省等）を行い、情報を共有し、学びの深さと

幅を広げる。また、実習中に生じた疑問や直面した問題についてカンファレンスを行い、保育者を
目指す者としての資質・能力の向上をはかる。

グループディスカッションによる事後指導（短期大学）

○グループディスカッションの進め方

2年次保育実習Ⅰ責任実習終了後、学びの深まりを目的にエピソードを中心としたディスカッション
を行う。その後の意味づけを保育内容授業担当者（人間関係、教育・保育課程総論、表現、言葉、教
育・保育実習）の協力を得て授業時間の調整のうえ、実施している。

- ・対象：2年次全員
- ・場所：最初は全員が全体教室。その後、グループに分かれて話し合えるよう3教室に移動。最後
にまた全員が全体教室に集合。
- ・準備物：筆記用具と実習日誌。グループ協議にて使用する付箋と用紙。
- ・配布物：エピソード記録用紙。
- ・実施日：保育実習終了後1週目の授業2コマ4時間で実施する。
- ・時間と活動の流れ

8：50	全体の授業内容を学生に伝達、エピソード記録用紙を配布する。
9：00	エピソード記録記述。
9：30	3教室に移動。責任実習対象園児年齢別にグループ（5～6人）に分かれて進行者、 記録者、発表者もグループで決め、ディスカッションを行う。
10：30	休憩とまとめ、発表者の内容整理。
10：50	全体発表（グループの中で興味深い、重複していた内容のエピソード1, 2例）し た後に保育内容教員がその事例への講話とコメントを伝達する。
12：00	全体講評とエピソード記録を回収する。
12：20	グループで付箋貼り付けした用紙を教室壁に貼付する。

○参加学生の様子と授業の成果

学生本人の実習の振り返りにより導き出されたエピソードを、同グループ（対象園児年齢が同じ）
内の学生に開示して共感を得られること、自分の課題となる反省点が自分だけではないことを認識で
きることに加えて、何より、様々なエピソードから保育を見る視点やその対応における多様性に気づ
く機会になることが大きな成果である。

参加している学生の表情も、授業当初の緊張した表情が徐々に安心してきて、同調した表情に変わ
っていく。ディスカッションと全体発表の中で、自身の実習におけるエピソードが可視化されていく
ことの経験が、学生本人のエピソードの意味の深まりと保育の学びにつながっている。

2) 対話と省察による学びの集積化・共有化（シェアリング）

対話とは、物事の意味を探求するために、テーマに関してさまざまな角度から意味を考える会話である。対話の中では自己を振り返り、互いの理解を求めながら共同思考が生み出される。保育実習でのさまざまな実践について、対話と省察により学びを集積化・共有化する取り組みを提示する。項目①～④は、対話と省察を通じた学びのシェアリングの例でもある。

- ① 「プロとしての保育者」の姿をテーマにした対話
- ② 実践知を繋ぎ合わせて集合知とする過程からの学び
- ③ できなかったこと、失敗したことの意識化と克服に関する対話
- ④ 対話による学習課題の焦点化、今後の取組みの見通しづくり

例えば、項目①は、実習の中で見つけた「プロとしての保育者」の姿について、対話しながら思考を拡張させていく。意見を交流させて互いの学びを集積し、共有しようとするものである。項目③は、学生の「できたこと」「できなかったこと」を意識化し、「できなかったこと」に焦点をあてる。“なぜできなかったのか”、“できるためには何が必要か”、“そのために今何がかしたいのか”を言葉に表すことで、更なる学びへと導く取り組みである。これらのように、自己の考えを付箋紙に書き、集約する過程で学び合う“従来のワークショップ”から、学生としての経験に内在化された学びを“対話型アプローチ”によって“見える化”し、学生自身が意識化できるように指導することで、より実習での学びが深化し、次へのステップとなっていく。また、学生としての実践知を出し合い、互いに交流し集約することで、集合知を導き、集積し、シェアリングすることが可能となる。自分や友人の実習経験からの学びや気づきは、単に実習を終えただけの考察とは大きく異なり、情感を伴ってリアルに再現されるため、その後の学習意欲が喚起される。なお、これらは、実習を終えた学生集団が行うことから始めるが、単なる事後指導に留まらず、実習を控えている下級生をメンバーに組み入れることで、彼らにとっては効果的な事前指導ともなる。こうした指導により、保育実習という実践の知から、学びの集積化と共有化が図られるとともに、主体的な連環型の学習が可能となる。

①ワールド・カフェ

相手を変えながら、少人数での対話を積み重ね、全員でテーマを掘り下げる「大規模型対話」。保育実習についてメンバーを変えて対話することで、個々人の経験をつなぎ合わせ、体験の振り返りと再構築を行う。

②OST（オープン・スペース・テクノロジー）

討議テーマを参加者が自ら提案して仲間を募り、ミーティングを通して自律的に対話を深める。保育実習における疑問や課題を学生が自主的に検討することで、体験を総括し、その後の主体的な学びにつなげていくことができる。

③PBL（Project-Based Learning）

PBLとは「課題解決型学習」であり、実習中に起きた具体的な問題（例えば子どもへの関わり、緊急時の対応、子どもの発達過程など）について、グループで議論や調査等を行い、問題解決に向けた道筋を検討する。学生自身による主体的なケーススタディーの形をとる場合もある。

④カンファレンス

主に、研究会や検討会等の会議を示す。実習活動の具体的場面をケースとして取り扱い、そのケースの解決に向けた支援や展開について、専門職ないしはその専門職に関する指導・助言が可能となる熟達者を踏まえ、意見交換ならびに学習の機会として展開する。

ワールド・カフェによる実習事前事後指導（四年制大学）

実習事前・事後指導の一環として、2年次、3年次、4年次の学生が一堂に会してワールドカフェを実施している。2年生にとっては、保育実習Ⅰ（保育所・施設実習）の事前指導、3年生にとっては、保育実習Ⅰ（保育所実習）の事後指導、保育所実習Ⅰ（施設実習）の事前指導、4年生にとっては、保育実習Ⅰ（保育所・施設実習）の事後指導、保育実習Ⅱ及びⅢの事前指導として位置付けている。

○方法および内容

- ・対象：2年、3年、4年の保育課程学生。各学年の対象者は最大で20名のため、最大で60名。
- ・場所：大学の学生食堂。
- ・環境：食堂の奥のスペースを利用し、4人～6人用のテーブルに4人で着席する。4人の中には全ての学年が入るように工夫する。できるだけいつものメンバーにならないように互いに配慮する。
- ・準備物：各テーブル（模造紙、水性マーカー10色（プロッキー）、クレヨン1セット、トーキングオブジェクト1個）、チベタンベル1個（終了の合図用）、プレゼンスライド上映用機材（プロジェクタ、スクリーン、PC）、PA機材
- ・配付物：2年生から4年生までの、これまでの実習施設と今年度の実習施設一覧表
- ・学生の持ち物：保育実習日誌、施設実習日誌、実習時に使用したメモ帳など。
- ・実施日：4月上旬、1年生のオリエンテーション期間の1、2限に実施する。
- ・時間と活動の流れ：

09:00 集合、着席

09:10 新年度の実習担当教員紹介、この時間のねらい、
ワールドカフェの説明開始 ※スライド使用

09:30 第1ラウンド・開始 スライドは「問1」を常時上映

10:05 第1ラウンド・終了 スライドを用いて座席移動と次の活動について説明

10:10 座席移動 第1ラウンド・情報共有

10:25 第2ラウンド・開始

10:45 第2ラウンド・終了 座席移動

10:55 第2ラウンド・情報共有 第3ラウンド・開始

11:15 第3ラウンド・終了 模造紙の確認・デコレーション

11:20 リトリート・開始

11:40 リトリート・終了

11:45 授業終了と後片付け

○参加学生の様子

- ・2年生：初めての保育所実習に向かう不安や疑問を解消できる場であり、上級生 の話に真剣に耳を傾けていた。実習日誌や実際の保育実習の話聞きながら、先輩の「すごさ」を感じているようであった。同時に自分自身の保育所での実習を想像しながら、実習までの生活や準備しておくことの確認を行っていた。
- ・3年生：保育所実習を振り返りながら、4年生と一緒に2年生にアドバイスしたり、4年生との対話の中でも気づきを得ることができている。保育実習日誌を開いて、実習当時のことを思い出しながら、対話を進めることで、話の内容がより具体的になり、実際的なアドバイスが行われていた。実習日誌の書き方なども互いに見せ合ったりしながら、自分自身の経験を広めることにも熱心であり、情報共有に積極的だった。また、これからの施設実習について、4年生に対し、不安や疑問を投げかけ、それまでに準備しておくことを確認したり、自分の実習する施設と同じ種類の施設で実習した先輩を探したりして、積極的に情報を収集していた。
- ・4年生：3年生の様子とほぼ同じであるが、すべての自分の経験を伝えるとともに、他学年からも学ぼうとする姿勢が感じられた。4年生は自分で開拓した実習先で最後の実習を行うことから、2年生、3年生とは違った落ち着きと意識の違いがある。実習日誌の書き方の工夫や言葉がけの具体的な質問には、実習時を思い出しながら、丁寧に応じる様子が見られた。

○ワールド・カフェの導入による成果

- ・ワールド・カフェは2010年から部分的に実施し、3学年合同授業は2012年から行っている。
- ・対話型での活動を取り入れることで、一人一人の実習での経験が、とても豊かに語られることが分かった。また、自分自身の体験を聞き手に向かって生き生きと話す中に、自分自身の気づいていなかった経験に気づく様子も見られた。そこで、各学年の実習指導の初回に、3、4年生にはレディネスの確認、2、3年生には不安の解消をねらって合同のワールドカフェを実施することとした結果、概ね、期待した成果を上げることができている。
- ・合同のワールドカフェは、1、2時限を合わせて実施し、午後の3時限には、学年ごとの事前指導を行っている。3時限に行う実習指導では、その学年に特化した内容で進めているが、午前の対話が生かされ、午前のワールド・カフェを続けたような学び合いの雰囲気の中で進めることができている。

(5) 個別面談型

教員との個別のコミュニケーションを通じて、実習を総括し自己の課題を明確化する。

1) 「保育実習」科目担当者による面談

- ①実習の具体的な内容について報告させた上で、実習中のトラブルや深刻な悩みについて個別に聞き、助言する。
- ②担当者は実習日誌についての評価（優れた点・改善点）を伝え、今後の課題を明確する。
- ③事前指導で立てた目標が達成されたかどうか、学生に自己評価させる。

- ④実習評価票を基に、実習先での評価をフィードバックし、対話を通じて結果を解釈する。その際には、学生に自己評価との「ズレ」を認識させ、保育者としての課題を明確にすることが重要である。
- ⑤個別面談は、「保育実習指導」の正規時間内で実施される場合もあるが、面接という時間の構造上、時間割時間数の上限、担当教員数の上限など様々な理由から、時間外での指導が展開される場合も多い。

2) 「実習巡回指導」担当者による面談

- 1) 巡回指導報告書に基づき、巡回指導の際に参観した保育実践の内容、学生の様子、実習日誌、実習指導者との面談内容等について、巡回では伝えきれなかったことを中心に対話を行うことで、実習を総括し、今後補うべき事項を明らかにする。
- 2) 上記、(1)と同様に評価等を用いた指導が展開される。

3) その他教員との面談

- 1) その他の教員との面談が実施される。必要に応じて、別途実施される場合や正規時間外での指導も行なわれる。例えば、講義関連科目や演習実技関連科目の担当者との面談においては、各科目での習得内容がどのように実習において発揮されているかの振り返りがなされ、実習の成果が今後の養成校での学びや指導にフィードバックされる。
- 2) 上記、(1)と同様に評価等を用いた指導が展開される場合もある。

自己評価票による個別指導（短期大学）

自己評価票と実習先の評価票を比較して課題を明らかにしている。実習先からの評価票は、時間を決めて個別に見せている。実習評価を見ることで学生自身の課題を明らかにし、次の実習に活かせるようにしている（ただし、園に対しては評価を学生に見せていることはあまり公表していない）。学生には、実習先からの評価を見せた上で自己評価と比較させ、総合所見欄に感想と課題を書かせている。

(6) 外部講師参加型

現職の保育業務に携わる者や現任の施設職員等を招いて講演してもらうことで、実習で学んだことを深化させたり、保育に関する疑問を解消したり、自己課題の解決に向けた方向性に示唆を得ることができる。また、実習報告会などに外部講師として現場関係者を招く場合もある。

その他、下記キャリア支援型と連動する内容は、専門職者の現場において人事権を有する者（園長、施設長、理事長等）を講師として招聘し、講話いただくことにより職業意識の醸成的意義をもたせることも考えられる。

外部講師による指導（短期大学）

2年次に現場の先生を呼び、講話をお願いしている。毎年違う園長に来てもらっており、実習訪問指導時に、実習生が多い園を中心に声をかけて依頼している。講師を以前は固定していたが、6、7年前から近隣の園から人選するようになった。

施設職員を招いての実習報告会（四年制大学）

○実習報告会の内容・方法

実習生一人一人がそれぞれの実習のねらい、ねらいを達成するための手立て、実習での学び、考察、反省までを、レジュメにまとめて報告している。

概ね一人当たり7分程度で全員が報告しており、また、2年生は模造紙1枚に上記内容をまとめ、ポスターとして掲示している。

○学生に対する実習報告会のねらいや効果

実習のまとめを冊子にして、関係する施設に送付するため、その前段階としてのまとめの意味もある。各自の学びを言語化することでさらに深い洞察ができると考えている。

○施設職員の出席状況や反応・養成校との協働面における成果

実習生の報告の最後に、施設から来ていただいたゲスト（主に所長、主任保育士）に助言をいただいている。助言者から、「養成校がこのような報告会をしていることは知らなかった。可能であれば、広く声をかけていただき今後もぜひ参加したい」とする旨の意見をいただいている。

助言者1名は当該実習施設の担当者を実習訪問指導でお会いした感触から選出し、依頼している。助言者には事前に資料を送付し、助言のコメントをいただくようにしている。それ以外の施設には、開催案内を送付し、オブザーバーとして報告会の参観を呼びかけている。

実習生は単にボランティアのような立場で実習しているのではない。まさにいま、保育所保育指針が示している保育のあり方を実習の場で具体化することや、保育士の姿から指針に述べられた多くを学ぼうとしていることを理解していただき、保育現場の保育力の向上と昭和の保育からの脱却を促そうと考えている。

（7）キャリア支援型

保育士資格の登録手続き、就職活動の支援（卒業生を招いての講演やマナー講座など）を事後指導の一環として、実施する場合もある。

実習指導における事後指導の最終的な目標は、学び続け、成長し続けられる保育者の養成であり、そうした学生を保育者として保育現場へ輩出することである。おのずと全ての実習を終えた後の事後指導の意識は、そこへ集約されることとなる。しかしながら、キャリア支援型の指導は、必ずしも教員主導で行なわれるわけではなく、事務局ないしは学校全体を挙げて取り組まれる活動として考えることができる。